

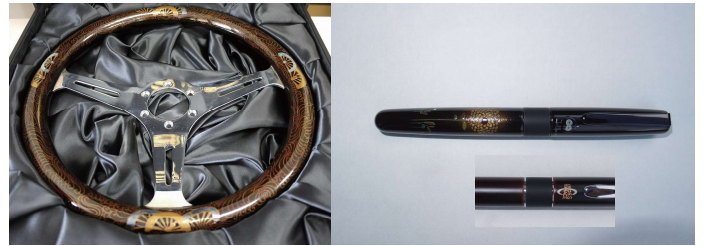
三田 私クステラスのマークをつけたペンを作ってもらったんですよ。うちのかみさんも小さい頃に好きだった絵本のキャラクターのようなものをつけていました。結構ハードな仕事だったみたいなんですけど。

金野 そういった技術を持っていらっしゃる方がいるんですね。

松沢 細かく再現しちゃうんですよ。その通りに。

松嶺 例えばここにあるキャンバスのこの絵を、フィッシングピックって、フォントまで再現して描いちゃうんですよ。

三田 今度その写真持ってきますよ。



松沢 そういった人が岩手にいるんですけど、あまり知られていなくて。その蒔絵師の大川さんも、漆塗りがやりたいんだけど、食っていけないから佐川急便で働きながらやっていたんですよ。当時は。今はやっていないですけど。それでいろいろ仕事をお願いするようになって、漆の仕事をどんどん受けれるようになって、今は漆の仕事一本でやっています。どうしても浄法寺塗とか、シンプルな漆塗りっていうのが岩手の場合は多いので。そっちはやっぱり目が行くんですけど、実はもっとすごい漆の技術がある。それをいろんな分野に使ってもらう。松嶺さんもそうだし、まだまだたくさんあると思うんですけど。

金野 それは松嶺さんのアイデアが風穴空けたわけですよね。そこにまだまだ未来がありますよね。

松嶺 本当です。実は私大阪のアートフェアにノミネートいただいて、それがコロナでなくなっちゃったんですけど、一日だけ復活するっていう連絡を昨日いただいて。一番感銘を受けられた私の作品がその漆を使ったもので。東京芸大で博士課程を取っているキュレーターさんなんですけど、「すばらしい、世界レベルだ」って言うてくれていて。僕が全然手をかけず出来上がったので、なんか恐縮ですけどね。

松沢 でもよかったですね。

松嶺 やっぱりそういうところにレベルをぐっと引き上げてくれる作品。僕はあれを持って、2019年に3ヶ月アメリカで飛び込み営業しましたね。その時も漆のドクロを持って歩いたんですよ。僕もこうやって車椅子のなりなので、ギャラリーとか入っていくと最初なめられるんですよ。やっぱりアーティストです、日本から来ました。っていうと「へー」って。でもあのドクロの作品見せると、「おいおいおい」って。

金野 空気変わるんだ、すごい。

三田 最初は優しくされるんじゃないんだ(笑)

金野 やっぱり伝統工芸とアートが結びつくと海外の方はクールに思うんでしょうね。

松嶺 だと思います。

金野 なかなか日本では得られない評価なんじゃないかな。

松沢 日本だと漆っていうと、古いイメージがあって、お正月にしか使わないとか漆器のイメージが強いんですけど、海外の人はまったく先入観がない。漆のツヤとか光り方がすごいなって直感的にわかるところがあるんですかね。

金野 ツヤが本当に色っぽいですもんね。それがドクロにまよってたらそれはメロメロになりますよね。

松嶺 なんかやっぱり自分も日本人として、日本の伝統工芸とか、格式あるものにあえて戻って制作することって、自分が今からわざとカッコつけて、甲冑着るみたいなちょっと違和感があって。逆にあえて日本の古いものを取り出してくるっていう違和感があるんですけど、海外の人から見ると、日本らしさとか、海外の人と勝負するときにやられたって感じになるのはやっぱりそういう伝統的なパワーを持ったものみたいですね。

松沢 海外の人たちは長い伝統、歴史っていうものに対してリスペクトする。それだけですごいなっていう。日本の長い歴史もあるし、漆自体も9000年くらいの歴史がある。だからそういうのに対してのすごさを感じるんでしょうね。

金野 それって言語化しないんだけど、肌で感じるんですよ、海外の方って。これやばいみたいな。あと物として、9000年前のものが残ってたっていうのがそれで、強度増すじゃないですか、漆って。それは長いことみんなの目を楽しませたり、心ワクワクするものになりますよね。

三田 会社でクステラスのほかに、古い貸家をリノベーションしたりしているんですけど、「岩手アートプロジェクト」という団体にも物件を貸しているんですよ。2019年に長田町に完成したんですけど、海外のアーティストの方も出入りするということになったので、今までと考え方を変えて、単に丈夫にしてきれいにするだけでなく、部材を磨いて戻すみたいなことを大工さんに話をして。そうしたら大工さんは結構抵抗があった。新しい部材を入れるのが仕事だったので、「え？それでいいの？」みたいな感じだったんだけど、海外の目の肥えたアーティストの人たちは考え方が違うからといって納得してもらって。それはすごい評価してもらえたというか、言わなくてもアーティストは気づく。理解してくれましたね。

松嶺 そうなんですよ。なんかだから僕ら日本にいと、単一民族で。海外に出ると、多国籍で。思ってるよりそうとう民族戦争なんですよ。今は実際に切りつけ合ったりしないですけど。自分のアイデンティティはなんなのかみたいなことでずっと戦ってるんですよ。なんかブラック・ライプズ・マターもそうですけど、海外に出た時に、日本人なりのエッジを相当効かせないと、埋もれちゃう。逆に効かせると「おおージャパニーズすごいな」ってなりますね。

金野 やっぱり悲しいかな、教育がそうなのかわからないんですけど、ちょっと前までは日本のこと喋れない。自分が何者かっていうことが言えないっていうのがありましたよね。そこをちょっと見つめ直す形ができていないじゃないですか。自分はこの国からきて、おたくはどうなんだっていう会話ができるようになって。それこそまさに仰るとおり個を確立するっていうことがすごく大事。